の共撰である。芭蕉が元祿五六年の交、「栖去之辨」を草し「閉關之說」を作つて居た頃、彼は俗に在つて俗を脫すべき工夫に專念して居たのであつた。かくして彼が到達した境地が、即ち所謂輕みの新風であつた。『炭俵』は實にこの芭蕉晩年の輕みを代表するものとして知られて居る。だからこゝに『猿蓑』以後に於ける芭蕉の新しい歩みは、最もよく示されて居るわけである。たゞ芭蕉の所謂輕みは、あくまでも「高く心を悟つて俗に歸る」(三册子)心境から發したものでなければならぬ。然るに野坡の徒は必ずしもこの芭蕉の眞意に徹せず、單に世俗的な流行の輕きを追ふ傾があつた。爲に芭蕉歿後淺膚卑俗の調がこゝから發するに至つたのは、誠に遺憾とすべきである。

『續猿蓑』は半紙本二册、元祿十一年刊、井筒屋板である。板元の言ふ所によれば、何人の撰とも分らないが、翁遷化の後伊賀上野なる翁の兄の許にあつた草稿を、そのまゝ世に弘める事にしたのだといふ。板本には正しく墨消書入等の跡があり、全體の體裁も整はない點が見られ、事實何人かの草稿のまゝの如く思はれる。然るにこの書については當時から種々論難があつて、越人の如きは『不猫蛇』や『猪の早太』で支考の僞撰たる事を痛論した。その後またこれに疑を挿むものが多く、爲に七部の中から除かうとさへされて居る。しかしこの書の全部を支考の僞撰と認める事もまた當らないので、これについては從來種々考證論議されて居る。就中志田義秀氏の論考(改造社版『俳句講座』所收「俳書解說篇」參照)は最も詳細で、要するに本集は芭蕉が生前關係したものである事は確かであり、その後支考によつて若干手を加へられたものと認められて居る。なほ志田氏の論考以後紹介された參考資料をあぐれば、元祿七年九月二十五日附正秀宛芭蕉の書簡に、「伊賀へ素牛便之節御狀竝月の御句感心、飛入客則續猿蓑に入集申候」とあり、正秀の「飛入の客に手をうつ月見哉」の句は、正しく今の『續猿蓑』中に入集して居る。又元祿七年九月十日附去來宛(推定)芭蕉の書簡に、

猿蓑後集いせより支考參候を相手に漸〻仕立候。いそがしまぎれに取かため候へば無心元存候へ共、前集に大まけはすまじき樣に存候。尤下見板之あらまし又々貴樣へ御世話成不被下候はでは成申まじく候。

とあつて、これによれば芭蕉がこの集の後見をした事は疑ふ餘地がない。許六の『歷代滑稽傳』に「江戸にて保生沾圃をすゝめ、續猿蓑を手傳して伊賀に歸る」とあるのなどから案ずるに、最初芭蕉は沾圃をして本集を撰ばしめ、元祿七年故鄕伊賀に滯在中伊勢から來た支考を相手に編輯を終へ、すでに去來に出版の相談までして居る間に歿したのである。その草稿を支考が幾分自己に有利に改竄し、井筒屋に上梓せしめたものが、即ち今の『續猿蓑』であらう。だからそれは決して越人等の言ふ如く、僞撰として排すべきものではない。支考が「祖翁一代の法華經」(削掛の返事)と讃して居るのは、些か私する嫌がないではない

が、芭蕉晩年の輕みを代表するものとして、『炭俵』より更に重きをなすものと言はなければならぬ　たゞ若干支考の私意を加へた所が認められ、純粹性を傷けて居る事は惜しむべきである。

七部の書が漸く俳家の間に金科玉條視され、流布が汎くなるに及んで、これに關する註釋論辯の書も現はれ、又これに倣つて其角七部集・樗良七部集・蕪村七部集等の如き類書も多く出來た。又後には七部を新に小形本に翻刻したものも幾種か出來た。それらに關しては今詳しく述べる遑がないので、たゞ註釋の書類について些か附說しておかう。

雪中庵二世吏登は寬保二年正月十五日から三月二十五日までの間に亙つて、七部集中の難解な發句・附句を門人たちの爲に講じた。その口述を上梓したのが『七部搜』で、七部集に關する註釋書として最も古いものである。卽ちかうして寬保頃にはもはや七部集の講義が行はれたのであるが、その後蕉風復古の機運が熟すると共に、芭蕉の作品・傳記等に關する研究も漸く盛んとなり、七部集の註釋もまたこれに伴つて相ついで出るやうになつた。而してその多くは連句のみを註したものであるが、中には『七部集大鏡』・『猿蓑逆志抄』等の如く發句の解に及んだものもある。今それらを一々列擧して解說する事は出來ないから、『七部搜』以下最近の刊行に至るまで、その主な書目だけを掲げるに止めよう。

七部搜	二册	櫻井吏登著	寶曆十一年刊	
俳諧古集之辯	三册	遲日庵杜哉著	寬政五年刊	
冬の日注解	二册	黃華庵升六著	文化六年刊	
七部集大鏡	七册、	月院社何丸著	文政六年頃刊	
續猿蓑註解	一册	同　上著	文政六年刊	
俳諧七部通旨	十四册	錦　江著	嘉永二年稿	
猿蓑逆志抄	七册	東杵庵樨柯著	萬延元年刊	
七部婆心錄	六册	原田曲齋著	萬延元年刊	
標註七部集	二册	惺庵西馬著	元治元年刊	
冬の日抄	一册	幸田露伴著	大正十三年刊	
春の日・曠野抄	一册	同　上著	昭和二年刊	
ひさご・猿蓑抄	一册	同　上著	昭和四年刊	
炭俵・續猿蓑抄	一册	同　上著	昭和五年刊	
猿蓑評釋	一册	志田義秀・新田閑寬著	昭和七年刊	

評釋猿蓑（岩波文庫）　一冊　幸田露伴著　昭和十二年刊
猿蓑俳句鑑賞　一冊　伊東月草著　昭和十五年刊
芭蕉七部集俳句鑑賞　一冊　川島つゆ著　昭和十五年刊

昭和十六年二月十日印刷
昭和十六年二月十五日發行
昭和十九年十月十日再版發行

校註　俳諧七部集　（六〇〇部）

定價金壹圓五拾錢
特別行爲稅相當額金拾八錢
合計壹圓六拾八錢

著者　潁原退藏
東京都神田區錦町一丁目十六番地
發行者　三樹彰
東京都本郷區眞砂町三十六番地
印刷者　龜谷良一（東京一三三）
東京都本郷區眞砂町三十六番地
印刷所　日東印刷株式會社

（出版會承認號 イ 1212）

發行所　東京都神田區錦町一丁目
振替口座東京四九九一番　株式會社　明治書院
電話神田（25）二二一一四四四九八七番番番

配給元　東京都神田區淡路町二丁目九番地　日本出版配給株式會社

（日本出版會會員番號134008番）

ト287-21

○大田潤■校註古事記　定價壹圓四拾錢
大田潤■校註祝詞宣命　定價壹圓
堀江秀雄■校註日本書紀　定價壹圓
○武田祐吉■校註竹取物語　定價六拾錢
○武田祐吉■校註大和物語　定價六拾五錢
武田祐吉■校註今昔物語　定價八拾五錢
金子元臣■校註宇津保物語　定價六拾錢
金子元臣■校註源氏物語　定價壹圓參拾錢
吉川秀雄■校註落窪物語　定價壹圓四拾錢
久松潛一■校註堤中納言物語　定價九拾錢
金子元臣■校註枕草子　定價壹圓四拾錢
佐藤球■校註大鏡　定價壹圓四拾錢
和田英松■校註增鏡　定價壹圓四拾錢
石橋尙寶■校註十訓抄　定價壹圓四拾錢
鳥野幸次■校註保元平治物語　定價壹圓四拾錢
內海弘藏■校註平家物語　定價貳圓拾錢
堀江秀雄■校註神皇正統記　定價七拾錢

內海弘藏■校註徒然草　定價七拾五錢
鳥野幸次■校註土佐日記　定價七拾錢
鳥野幸次■校註十六夜日記　定價六拾錢
關根正直■校註紫式部日記　定價七拾錢
佐藤仁之助■校註假名吾妻鏡　定價七拾錢
關根正直■校註更級日記　定價六拾錢
鳥野幸次■校註東關紀行　定價六拾錢
○鳥野幸次■校註奥の細道　定價六拾錢
頴原退藏■校註日本永代藏　定價七拾五錢
頴原退藏■校註世間胸算用　定價六拾五錢
佐成謙太郎■校註謠曲　定價壹圓
和田萬吉■校註狂言選集　定價壹圓貳拾錢
佐藤仁之助■校註雨月物語　定價七拾五錢
○金子元臣■校註古今和歌集　定價壹圓貳拾錢
○尾上八郎■校註新古今和歌集　定價壹圓七拾錢
佐佐木信綱■校註金槐和歌集　定價壹圓